

43122

教科書文庫

4
810
33-1942
20000 19375

200030
2731



資料室

3959
Mo 14

初等科國語

一

文
部
省

もくろく

一	天の岩屋	四
二	参宮だより	八
三	光は空から	十二
四	支那の春	十四
五	おたまじゃくし	二十
六	八岐のをろち	二十五
七	かひこ	三十一
八	おさかな	四十一
九	ふなつり	四十四
十	川をくだる	四十七
十一	少彦名神	五十六



広島大学
図書印

十二	田植	六十四
十三	にいさんの愛馬	六十五
十四	電車	七十
十五	子ども八百屋	七十五
十六	夏の午後	七十八
十七	日記	八十二
十八	カッターの競争	八十八
十九	夏やすみ	九十四
二十	にぎのみこと	九十六
二十一	月と雲	百二
二十二	軍犬利根	百六
二十三	秋	百二十二
二十四	つりばりの行くへ	百二十四



一の あめ 天の岩屋

あまてらすおほみかみ 天照大神は、天の岩屋へおはいりになって、岩戸をおしめになりました。明かるかった世の中が、急にまっくらになりました。

大勢の神様が、お集りになって、

「どうしたら、よからうか。」

と、ごさうだんなさいました。

思ひかねの神といふちゑのある神様が、たいそうよいことをお考へになりました。それによって、神様がたは、いろいろなことを、なさることになりました。

まづたくさんの鶏を集めて、しきりにお鳴かせになりました。

ある神様は、大きな鏡をお作りになりました。ある神様は、きれいな玉をたくさん作って、首かざりのやうに、ひもにお通しになりました。またある神様は、山へ行つて、さか木を、根のついたままほって、持っていらつしやいました。

太玉のみことは、このさか木に、鏡と玉をかざって、岩屋の前にお立てになりました。

天のこやねのみことは、岩屋の前へ進んで、のりとをおよみになりました。

天のうずめのみことは、まひをおまひになりました。かづらをたすきにかけ、ささの葉を手にとって、ふせたをけをだいにして、とんとんふみ鳴らしながら、おもしろくおまひになりました。



大勢の神様は、どっとお笑ひになりました。

あまりおもしろさうなので、天照大神は、少しばかり岩戸をおあけになって、おのどきになりました。神様がたは、さか木を、ずっと前へお出しになって、鏡をお大神に見せておあげになりました。大神はふしぎにお

思ひになつて、少し戸の外へ出ようとなさいました。
 岩戸のそばにいらつしやつたあめのたぢからその天手力男神は、この時
 とばかり、さつと岩戸をおあけになりました。
 天照大神が外へお出ましになると、世の中が、もとの
 やうに明かるくなりました。

大勢の神様は、手をうつてお喜びになりました。

二 参宮だより

けさ、元氣で、こちらへ着きました。

まづ、外宮のおまゐりをすまして、それから、内宮へ
 おまゐりをしました。

宇治橋を渡ると、青々としたしばふがつついて、鶏が
 遊んでみました。五十鈴川のきれいな水で手を洗い、
 口をすすぎました。すきとほった水の中に、たくさんの
 の魚が、すいすいおよいでみました。

道の兩がには、千年もたったかと思はれる大きな
 杉の木が、立ち並んでみました。さくさくと玉じやり
 をふんで、神殿の御門の前へ進みました。さうして、う

やうやしく拜みました。何ともいへない、ありがたい
氣がしました。

神殿は、外宮と同じやうに、お屋根がかやでふいてあ
りました。むねには、大きなかつを木が並んで、兩はし
に、千木が高くそびえておました。みんな白木づく
り、金いろのかなぐが、きらきらとしておますが、その
ほかには、何のかぎりもありません。まことにかうが
うしくて、しぜんと頭がさがりました。

かへりに、たいまをいただき、宇治橋の鳥居のそばで、
しゃしんをとりました。

方々を見物して、二見へ来ました。今夜は、ここでと
まります。あすは、朝早く起きて日の出を拜み、それか
ら、かしはらじんぐらう檀原神宮へ向かつてたちます。

またやうすを知らせますから、たのしみにして待つ
ておいで。さやうなら。

四月十日

兄から

正男さんへ

三 光は空から

光は空から若葉から、

明かるい、明かるい、若葉から。

天長節はうれしいな。

花から花へてふがまひ、

花から花へはちがとぶ。

天長節はうれしいな。

小鳥のおんがくほうほけきよ、

ちいちい、びびい、ほうほけきよ。

天長節はうれしいな。

川が流れる、野がつづく、

ふもとの町は旗のなみ。

天長節はうれしいな。

四 支那の春

川ばたのやなぎが、すっかり青くなりました。つみ重ねたどなうの根もとにも、いつのまにか、草がたくさん生えました。

あたりは、うれしさうな小鳥の聲でいっぱいです。

「もうすっかり春だなあ。」

「ここで、あんなにはげしい戦争を



したのも、うそのやうな気がするね。」

どなうの上に腰をかけて、川の流れを見つめながら、日本の兵たいさんが二人、話をしてみます。兵たいさんは、今日は銃を持ってみません。てつかぶともかぶってみません。二人とも、ほんたうに久しぶりのお休みで、村のはづれまでさんぽに来たところですよ。



「兵たいさん。」

「兵たいさん。」

大きな聲で呼びながら、支那の子どもたちが、六七人やつて来ました。

「おうい。」

兵たいさんがへんじをすると、みんな一度に走り出しました。子どもたちといっしょに、黒いぶたや、ふとつたひつじが二三匹走って来ます。

兵たいさんのそばまで来ると、子どもたちは、いきなりどなうの上にかけあがらうとして、ころげ落ちるものもあります。先にあがった子どもの足を引っぱって、はねのけようとするものもあります。

「けんくわをしてはいけない。」

「仲よくあがって来い。」

大きな聲で、兵たいさんがしかるやうにいひます。しかし、にこにこして、うれしさうな顔です。

先にかけあがった子どもは、兵たいさんにしがみつきます。あとから来た子どもは、兵たいさんのけんに

つかまったり、くつにとりついたりします。

「これは、たいへんだ。さあ、お菓子あげよう。向かふで遊びたまへ。」

「氷砂糖をあげよう。橋の上で仲よく遊びたまへ。」
兵たいさんたちは、ポケットから、キヤラメルの箱や、氷砂糖のふくろを取り出しました。

「わあっ。」

と、子どもたちは大喜びです。ぶたもひつじも、いっしよになつて大さわぎです。

お菓子をもらふと、子どもたちは、おとなしく川のふちに腰をおろしたり、ねそべったりしました。さうして、お菓子をたべながら、歌を歌ひ始めました。まだ上手には歌へませんが、兵たいさんに教へてもらつた「愛國行進曲」です。

川の水は、静かに流れてゐます。どっちから、どっちへ流れるのかわからないほど、静かに流れてゐます。

川の向かふは、見渡すかぎり、れんげ草の畠です。むらさきがかつた赤いれんげ草が、はてもなくつついて

みます。

どこからともなく、綿のやうに白い、やはらかなやなぎの花がとんで來ます。さうして、兵たいさんのかたの上にも、子どもたちの頭の上にも、そつと止ります。

寒い冬は、もうすっかり、どこかへ行つてしまひました。静かな、明かるい、支那の春です。

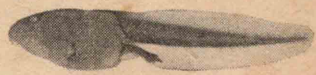
五 おたまじやくし

おたまじやくしは、毎日、大勢の兄弟や仲間といつしよに、池の中を泳いでみました。まるで、ありの行列のやうに、あとからあとから、ぞろぞろとつづいて行きました。どれも、これも、まるい頭をふり、長い尾をふつて、元氣よく泳いでみました。

おたまじやくしは、手も足もなく泳げるのですから、自分たちの親が、あの四本足の蛙だらうとは思つてみませんでした。それよりも、ときどき池の中で見かける鯉やふなが、親ではないかと思つたことがあります。また、小さなめだかを見ると、これも、自分た

ちの仲間ではないかと、思ったこともありました。

しかし、おたまじやくしには、たくさん
の兄弟があるのですから、親のそばに
なくても、ちつともさびしくはありませ
んでした。また、めだかや、どちゃうなど
といっしょに、遊ばなくてもよいのでした。
春の日は、だんだん過ぎて行きました。
水草が青々とのび、水の上には、ときどき



とんぼがとんで来て、かげをうつすことがありました。
このころになると、おたまじやくしは、尾のつけ根の
ところが、少しふくれて来ました。初めは、それと気が
つかないほどでしたが、のちには、だんだんふくれ出し
て、とうとう、それが二本のかはいらしい足になりました。
た。

おたまじやくしは、何だかおそろしいやうな、うれし
いやうな気がして、わいわいさわいでみました。さう
して、ときどき、水の上へ、顔を出してみたりしました。

それから、また何日かたちました。今度は、胸の兩わきが破れて、そこからも二本の足が出ました。

四本足になったおたまじやくしは、尾が、だんだん短くなつて行きました。さうして、水の中にあるのが、いやになつて來ました。水の中にあると、何だか息がつかまるやうな氣がしました。水の上へ顔を出すと、氣がせいせいするやうに思ひました。

ある日、岸の草につかまつて、池の外へ出てみました。もう夏の初めでした。草が、青々と茂つてみました。空には、お日様が、きらきら光つてみました。

あと足を曲げて、前足をついてすわつたかつかうは、これまでのおたまじやくしではありませんでした。かうして、陸へあがつたたくさんの子蛙は、草のかげのあちらこちらを、うれしさうにとびまはりました。

六 やまた 八岐のをろち

あまてらすおほみかみ 天照大神の御弟に、すさのをのみことと申して、たいそう勇氣のある神様が、いらつしやいました。



一人の娘を中において、泣いてゐました。

出雲いづもにおくだりになって、ひの川にそつて歩いていらつしやるど、川かみから箸はしが流れて來ました。みことは、「この川かみに人が住んでゐるな。」とお思ひになつて、川について、だんだん山おくへおはいりになりました。すると、おぢいさんとおばあさんが、

「なぜ泣くのか。」

と、みことがおたづねになると、おぢいさんが、

「私どもには、もと娘が八人ございましたが、八岐のをろちといふ大蛇だいじやに、毎年一人づつ取られて、残つたのは、もうこの子だけになりました。それに、今年もまた、その大蛇が出て來るころになりましたので、この娘に別れるのが悲しくて、泣いてゐるのでございませす。」

と申しました。

「いったい、どんな大蛇か。」

「その目はまっかでござ
います。一つのからだに
頭が八つ、尾が八つ。から
だは、八つの山、八つの谷に
つづくほどで、せなかには、こ
けも木も生えてをります。」
みことは、この話をお聞きになって、



「よし、その大蛇をたいぢてやらう。強い酒をたくさ
んつくれ。それを、八つのをけに入れて、大蛇の来る
ところに並べておけ。」

とおいひつけになりました。

そのとほりに用意しました。するとまもなく、あの
恐しい大蛇が出て来ました。酒を見つけて、八つの頭
を八つのをけに入れて、がぶがぶと飲みました。

そのうちに、よひがまはって、大蛇は、とうとう眠っ
てしまいました。

みことは、劔を抜いて、大蛇を、ずたずたにお切りに
なりました。血が、たきのやうに出て、ひの川が、まっか
に流れました。

みことが、尾をお切りになった時、かちつと音がして、
劔の刃がかけました。ふしぎにお思ひになつて、尾をさ
いてごらんになると、たいそうりっぱな劔が出て來ま
した。

「これは、たふとい劔だ。」

と、みことはお思ひになりました。

みことは、その劔を、天照大神におさしあげになりま
した。

七 かひこ

をばさんのうちから、二眠をすましたかひこを、二十
匹もらつて來ました。それを箱に入れて、ねえさんに見
せると、

「まあ、かはいいかひこね。でも、桑の葉をどうしたら
いいかしら。」

といひました。私は、かひこがほしくてたまらないので、もらって來ましたが、さういはれてみると、うちには、桑の木がないことに氣がつかしました。

二十匹のかひこは、桑の葉をほしさうにして、動いてみます。私は、竹田さんのところへ走って行きました。あそこの畠に、桑の木があることを思ひ出したからです。

さっそく、桑の葉をもらって來て、箱の中へ入れてやりますと、ねえさんは、

「葉が大きくて、たべにくいから、きざんでやりませう。」
といひました。小刀で、葉を切つてやりました。かひこは上手にたべました。

ある朝、大雨が降りました。風も吹いてみました。私は、いつものやうに、桑をもらってかへって來ました。
「ぬれた葉を、かひこにやって



はいけませんよ。」

と、ねえさんにいはれたので、私は、桑の葉を一枚一枚ていねいにふいて、かわかしてから、かひこにやりました。二日ほどたつと、かひこは眠りだしました。私たちがなら、横になってねるのに、かひこは、頭をちゃんとあげて眠ります。それも、一日中、そのまま眠りとほすので、首がつかれないだらうかと思ひました。

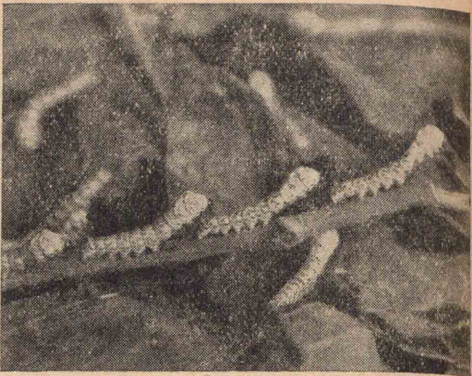
私は、早くまゆを作るところが見たいので、ねえさんに、

「いつごろまゆを作るでせう。」

と聞くと、

「今、三眠ですから、もうあと一度眠つたら、まゆを作りますよ。」

といひました。



むしあついで日がつづいて、かが出るやうになりました。ある夜、私が本を讀んでみますと、あまりかが多いので、かとり線香をつけました。

そのあくる日の朝、箱をのぞいて見ると、どうしたこ

とでせう、あんなに元氣のよかったかひこが、みんな弱
つてゐるではありませんか。

私はおどろいて、ねえさん呼びました。

「ゆうべ、桑をやるのを忘れませんでしたか。」

「いいえ、新しいのをたくさんやっておきました。」

「どうしたのでせうね。」

ねえさんも考へてゐましたが、

「このへやで、かとり線香をつけませんでしたか。」

とたづねられて、私は、はっとしました。

「ええ、ゆうべ、つけました。」

「あ、それですよ。かひこは、あれが大きらひですから
ね。」

「ねえさん、助るでせうか。」

「さあ。」

私は、あわてて窓をあけました。桑をもらひに行く
途中も、心の中で、「どうぞ、元氣になりますやうに。」と
いのりました。

つみたての桑の葉をやると、かひこは、どうやらから

だをのばすやうにして、そろそろたべ始めましたので、私はほっとしました。

けれども、どうしても桑をたべようとしなのが、五匹みました。そののち、だんだんやせて行って、三日めには、五匹とも死んでしまひました。

四度めの眠りをすましたかひこは、二日三日すると、からだもずっと大きくなって、桑の葉を、おいしさうに、たくさんたべました。

そのうちに、青白かったからだだが、だんだんすきとほつて見えるやうになりました。ねえさんは、

「さあ、もうちき、まゆを作りますよ。」

といひました。

ねえさんに、「こしらへてもらったわらのおうちを、箱の中へ入れてやると、かひこは、静かにはひあがつて来て、「さて、どこにまゆを作らうかな。」といふやうなやうすをしました。

かひこは、糸をはき出しました。目に見えないやうな細い糸を、さかんに口から出して、自分のからだのま

はりを包んで行きました。

「あんな青い桑の葉をたべて、よく、こんな白い糸が出て来るものですね。」

と、ふしぎに思っていひますと、ねえさんも、

「ほんたうにね。」

といひました。

初めは、うすい、うすい紙のやうなまゆでしたが、それが、だんだんあつみをもつて来て、かひこは、まゆの中に、かくれて見えなくなりました。

ある日、竹田さんが遊びに來ました。私が、かひこの箱を見せすと、

「あら、きれいなまゆができましたね。」
と、感心したやうにいひました。

八 おさかな

皿のおさかな、

どこから來たの。

皿のおさかな、

海から来たの。

海はひろびろ

なみの底、

たひやかつをが

みたでせう。

こんぶの林が

あるでせう。

わかめの野原が
あるでせう。

皿のおさかな、

もう一度、

泳ぐところが

見たいなあ。

九 ふなつり

「このへんが、つれさうだね。」

と、にいさんが、小川をのぞきこんでいひました。

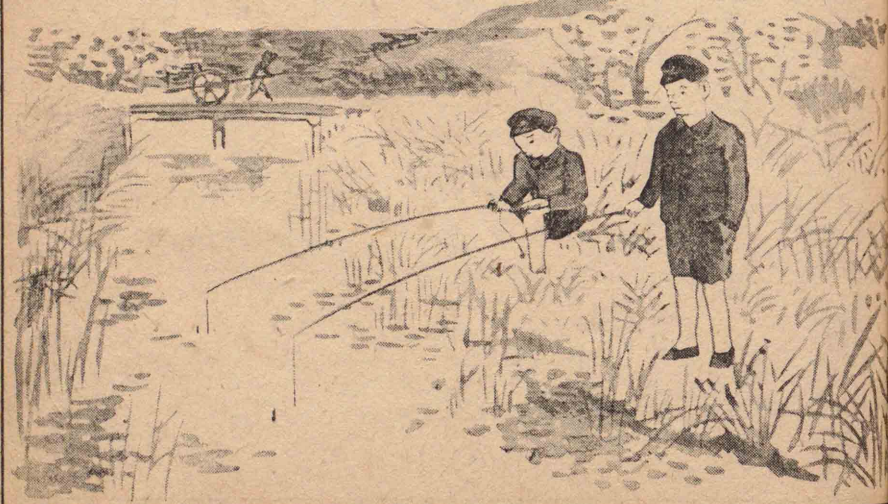
水草が、たくさん生えておりました。きつと、魚がかくれてゐるにちがひありません。私たちは、急いでつりのしたくをしました。

にいさんが、ひゅつと、つり竿をふるると、つり糸が、空に大きなわを急がきました。ぽんと音をたてて、うき

が水の上へ落ちると、波のわが、だんだん大きくひろがりました。にいさんと並んで、私もつり始めました。

二人は、じつと、うきを見つめました。

あたりは静かで、ときどき、川かみの板橋の上を通る荷車のひびきだけが、聞えて來ます。



ぴく、ぴく、ぴく——にいさんのうきが動きました。
にいさんは、あわてて引きあげました。

「なんだ、急さを取られたのか。」
と、つまらなささうに笑ひました。

空の雲が水にうつつて、うきのそばを、ゆっくり流れ
て行きます。

ぐぐ、ぐぐつと、今度は私のうきが、水の中へ引きこ
まれました。強い手ごたへが、つり竿をつたはって來
ました。はっと思つて引きあげようとすると、重くて

なかなかあがりません。つり糸がぴんとはって、つり
竿の先が、おじぎをするやうに、しきりに動いてゐます。

「五郎、おちついてあげるんだよ。」
と、にいさんがいひました。

にいさんと二人で、氣をつけながら引きあげると、大
きなふなが、水ぎはでびちびちはねて、うろこがきらき
らと光りました。

十 川をくだる

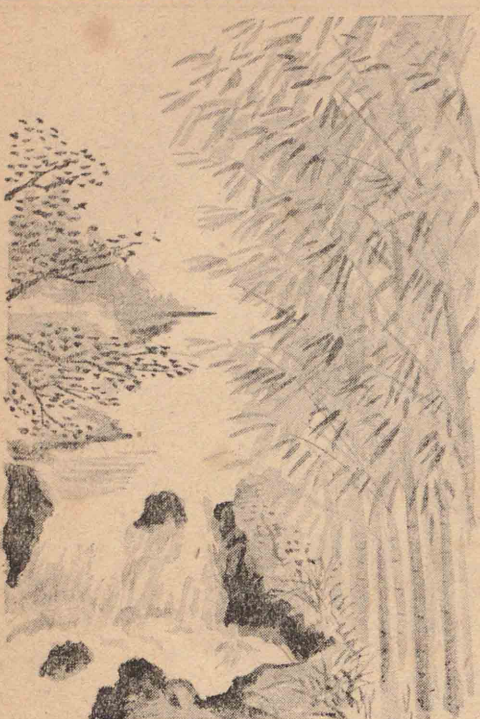
私は、一度、川にそって川口まで行ってみたいと思つてみました。

おとうさんが、許してくださったので、きのふの日曜日に、にさんと二人で出かけました。

朝つゆにしめった小道を通って行くと、川の岸へ出ました。

流れが急で、白い波が、石と石との間にわき返ってありました。

岸は、青葉でおほはれてありますが、ところどころに、つつじの赤い花が咲いてみました。にさんといっしょに、唱歌を歌ひました。すると、川の音も、同じ唱歌を歌つてゐるやうに聞えました。



茂った竹やぶがあつて、しばらく川が見えなくなりましたが、「ド、ド、ド、ド、ド」といふ水の音が聞えて来ました。川が、たきになつて落ちてゐるのでした。ときどき、流れがゆる

やかになつて、青々と水をたたへてみました。川原の石の上を、せきれいがとんでみました。

しばらく行くと、向かふの岸から、小川が流れこんで来ました。こちらの岸からも、小川がそそぎこんでいます。ちやうど親の手に、子どもがすがりつくやうでした。

まもなく、川の近くにある停車場に着きました。汽車が来たので、それに乗りました。汽車が走り出すと、すぐトンネルにはいりました。出ると、高いところを走つてゐるので、川は、ずっと下の方に見えました。

だんだん兩岸が開けて来て、川はばが廣くなりました。ところどころに中洲があつて、小さな木が生えてありました。川はおだやかになつて、音もなく流れてみます。

汽車が鐵橋を渡ると、今まで左手を流れてゐた川が、右手を流れて、日の光をあびて、まぶしいほど光りました。

村のふみきりを通る時、子どもがこちらを見て、ばん

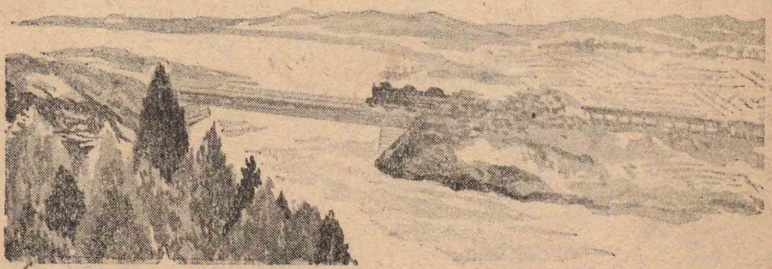
ざいをしてみました。

渡し場がありました。船頭さんが、舟をこいでみました。舟には、子牛も乗ってみました。

汽車が止ったので、私たちはおりました。

今度は、そこから馬車に乗って、川口の町まで行くことにしました。

「ポポー」と、ラツパを鳴らしながら、川岸の道を走っ



て行きました。そのへんは麥畠で、麥のほが出そろって、一めん黄色くなってみました。

川の向かふ側に、工場があつて、高いえんとつから、茶色な煙が出てみました。川の水は、すんではあませんが、青い空をうつしながら、ゆっくりと流れて行きます。

町の入口で、私たちは馬車をおりました。あみを干してあるのが、あちこちに見えました。車にかつををたくさんつんで、あせいよく引いて行くのに出あひま

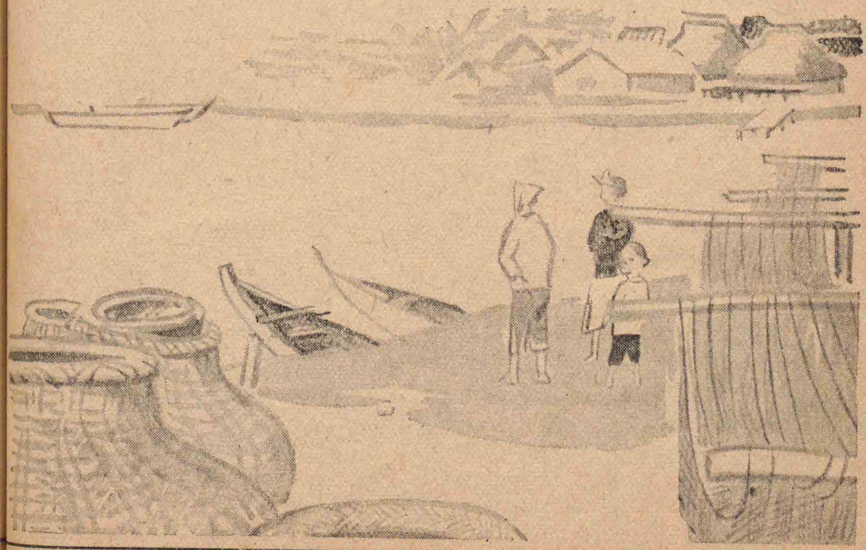
した。

町を通りぬけて、川口に近い岸に立つと、海が見えました。舟が、何ぎょうもつながれていました。川の水は、ここで海へ流れこんでゐます。

頭のすぐ上を、かもめが、五六羽とんで行きました。いその香をふくんだ風が、そよそよと吹いてゐました。

その夜、私は、次のやうなことを書いて、おとうさんにお目にかけました。

川は、初め走って流れてゐました。白い波をたてて、走ってゐました。つかれると、ときどき木かげに休んだり、さうかと思ふと、急に高いところからとびおりたりします。小さな川と、仲よく手をつないで、川は、いつのまにか大きくなります。



きらきらと光って笑ったり、青くすんで、じつと考へ
こんだりします。

川にも、いろいろな心持があるやうに思ひました。

十一 少彦名神すくなひこな

大國主神が、出雲の海岸を歩いていらつしやいます
と、波の上に、何か小さな物が浮かんで、こつちへ近寄つ
て來ました。

「何だらう、あれは。」

と、大國主神は、お供の者におつしやいましたが、お供
の者にもわかりませんでした。

だんだん近寄つて來るのを、よく見ると、豆のさやの
やうな物を舟にして、それに何か乗つてみました。

「豆のさやに、虫が乗つてゐます。」

と、お供の者が申しました。

しかし、虫ではありませんでした。
虫の皮を着物にして着ていら
つしやる、小さな神様でありました。



大國主神は、

「小さな神様だなあ。いったい、何といふお方だらう。とおっしやいますと、お供の者は、

「こんな小さな神様を、私は、見たことも、聞いたこともございませぬ。」

と申しました。

「あなたは、どなたですか。」

と、大國主神は、その神様に、おたづねになりましたが、へんじをなさいませぬ。

その時、ひよっこり出て来たのは、ひきがへるでありました。大國主神は、

「おお、ひきがへる、よいところへ来た。おまへは、方々へ出歩いて、何でもよく知ってゐるが、この小さなお方の名を知らないか。」
ひきがへるは、目をぱちくり



させながら、

「いや、ぞんじません。きつと、あのもの知りのかかしが、知ってゐるでございませう。」

と申しました。

かかしは、田の中に立って、四方を見てゐるので、何でもよく知つてゐました。大國主神は、かかしに向かつて、

「おうい、おまへは、この小さなお方を知つてゐるか。」
すると、かかしは、

「それは、少彦名神といふ神様でございます。からだは小さいが、たいそうちゑのあるお方でございます。」
と答へました。

大國主神は、たいそうお喜びになつて、少彦名神を、
おうちへおつれになりました。

二人は、兄弟のやうに仲よくなさいました。心を合はせて、野や山を開いて田や畠にしたり、道をつけたり、川に橋をかけたりなさいました。人間や、牛や、馬の病氣も、おなほしになりました。

ある日、少彦名神は、おっしゃいました。

「私は、いつまでも、ここにゐるわけにはいきません。これで、おいとまいたします。」



大國主神は、おどろいて、

「どうして。どこへおいでになるのですか。」

「遠いところへ行きます。」

「何しに行くのです。」

「新しい國を開きに。」

かひひながら、少彦名神は、あはの莖につかまって、するすると、おのぼりになりました。すると、一度しなつたあはの莖が、はね返るひやうしに、小さな神様のおからだは、ぽんと空へとびあがりました。

「さやうなら。」

と一聲おっしゃったまま、少彦名神は、もうお姿が見えなくなつてしまひました。



十二 田植

そろた、出そろた、
 さなへがそろた。
 植ゑよう、植ゑましよ、
 み國のために。
 米はたからだ、たからの草を、
 植ゑりや、こがねの花が咲く。

そろた、出そろた、
 植ゑ手もそろた。
 植ゑよう、植ゑましよ、
 み國のために。

ことしやほう年、穂に穂が咲いて、
 みちの小草も米がなる。

十三 にいさんの愛馬

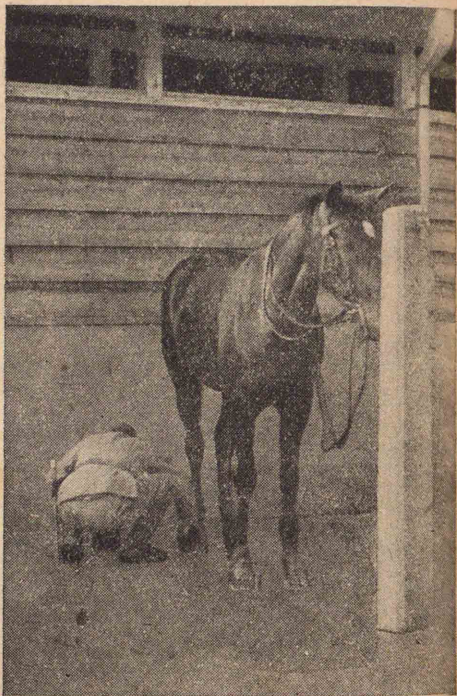
國男、今日は、軍隊の馬のことを知らせてあげよう。

毎朝、にいさんたちは、きつと馬屋へ行く。馬屋には、それぞれ受持の馬が、ちゃんと待ってゐるからだ。

馬屋へ行つて、馬をねどこから外へつれ出し、ひづめを洗ひ、鐵で作つたくしとはけで、馬のからだをこすつて、きれいにしてやる。すると、馬は、おとなしくじつとしてゐる。氣持がよくて、うれしいのだらう。

入營したてのころは、馬のそばへ近寄ることが、こはかつた。「オーラ、オーラ」といひながら、こはこは馬に近づく。馬は、おとなしくしてゐる。それでも、馬の足

をかかへて、ひづめを水で洗つてやるのには、なかなか勇氣がいった。もう、今では、なれてしまつて、そんなことは



何でもなくなつてしまつた。

あたたかい馬のからだや、すべすべした、やはらかい毛なみにさはると、もう、手入れをしないではゐられな

い。自分の馬が、ほかの馬にくらべて、少しでもきたな

いと、何だか馬にすまない気がする。それで、手入れにむちゆうになるのだ。

これほど、毎日馬をかはいがってやると、馬の方でも、ちゃんとにいさんをおぼえてしまふ。「ヒヒン」とないて、大きな目で、じつとにいさんを見つめる。

國男のすきなうちの犬を、「しろ、しろ。」と呼ぶと、しろが尾をふってとんで来るやうに、にいさんの愛馬安友も、「やす、やす。」と行ってやると、いかにもうれしきうに前足をあげて、かるく地面をたたく。かうなると、

もう馬ではなくなつて、まったくの友たちになつてしまふ。だから、自分のかはいがった馬のことは、いつまでも忘れられないで、お正月には、馬にあてて、年賀状をよこす兵隊さんもあるさうだ。

にいさんは、いつも、腰にふくろをさげてゐる。愛馬ぶくろと行って、その中には、馬のだいすきなにんじんがはいってゐるのだ。

いつか國男にも、にいさんの愛馬を、ぜひ見せたいと思つてゐるが、その時は、きつと、にんじんを忘れないや

うに頼むよ。

十四 電車

にいさんと、電車に乗りました。

人がいっぱい乗ってみて、あいてある席は、一つもありませんでした。私が、にいさんと並んで立ってみますと、すぐ前に掛けてみたよそのをぢさんが、私の顔を見ながら、

「ぼっちゃん、ここへお掛けなさい。」

と、いって、立ってくださいました。私は、

「いいんです。ぼく、立ってみますから。」

といひましたが、をぢさんは、

「いや、わたしは、もうぢきおりますから、

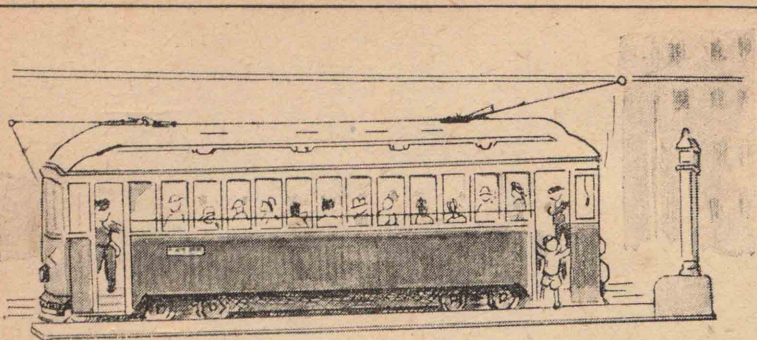
かまはずに、お掛けなさい。」

といひながら、あっちへ行きかけました。

「どうも、ありがたう。」

と、にいさんがいひました。

「ありがたう。」

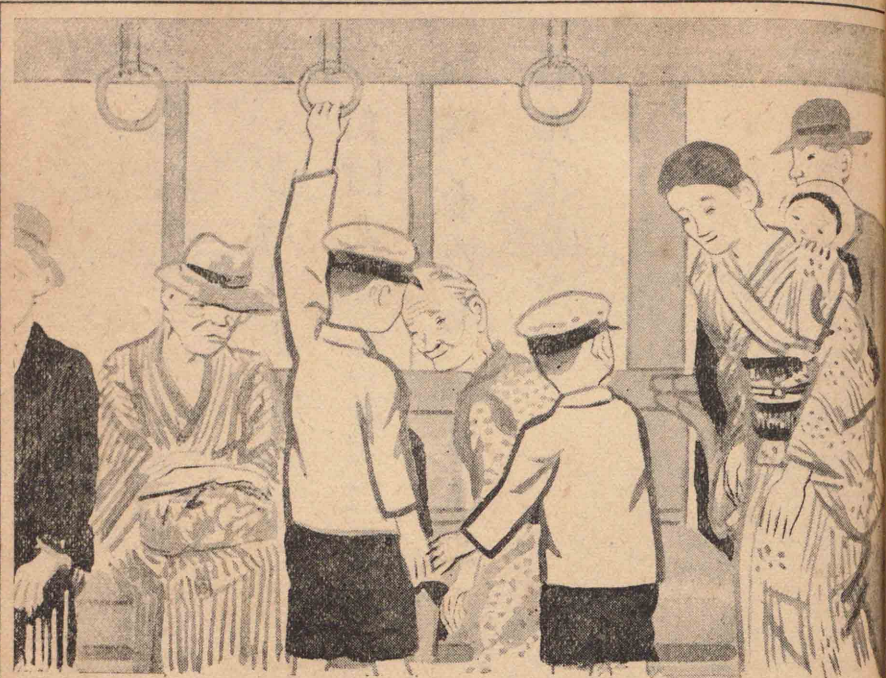


と、私もいひました。

「せっかく、あけてくださったのだ。おまへ、お掛け。」
と、にいさんがいひましたから、私は掛けました。

次の停留場へ来た時、をぢさんは、そこでおりののか
と思つたら、おりませんでした。

それから、二つ三つ停留場を過ぎて、表町まで来ます
と、人がたくさんおりて、席があきました。をぢさんも、
ここでおりました。にいさんは、私のそばへ掛けまし
た。



しかし、入れ代りに、大勢
の人が、どやどやとはいっ
て来ました。席はみんなふ
さがった上に、立ってゐる人
も、たくさんありました。

いちばんあとからはいつ
て来たのは、七十ぐらゐの
おばあさんと、赤ちゃんを
おぶつたをばさんとでした。

すると、にいさんが、小さな聲で、

「立たう。」

といひました。

おばあさんとをばさんが、ちやうど私たちの前へ来た時、私たちは、すぐ立って、席をゆづりました。二人は喜んで、

「どうも、ありがたうございます。」

といひながら、ていねいにおじぎをして、掛けました。電車は、また動きだしました。

十五 子ども八百屋

子どもの車だ、

八百屋の車だ、

子どもの買出し。

押せ押せ、車を、

よいしょ、よいしょ。

おとうさんは出征、

おかあさんと四人で、
八百屋だ、毎日。

押せ押せ、車を、

よいしょ、よいしょ。

くに子も、ひさ子も、

あと押し頼むぞ。

にいさん、しつかり。

押せ押せ、車を、

よいしょ、よいしょ。

きうりも、おなすも、

かぼちやも、トマトも、

にこにこしています。

押せ押せ、車を、

よいしょ、よいしょ。

おかあさんが待ってる。

お客も待ってる。
急いで、かへらう。

押せ押せ、車を、

よいしょ、よいしょ。

十六 夏の午後

「ジーツ」と、せみが鳴きだした。

ぼくは、はだして庭へ出た。せみは、桐の木で鳴いて
ゐる。そつと行って見ると、一メートル半ぐらゐの高さ

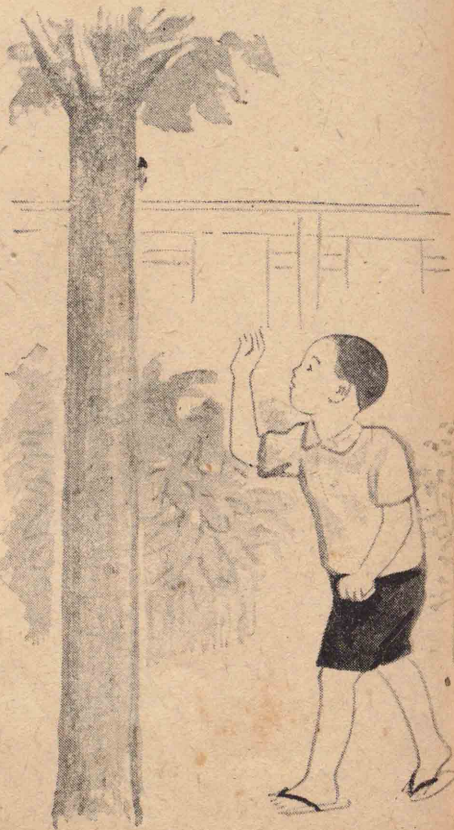
のところ、あぶ

らせみが一匹止つ

てゐる。せいのび

して、手をのばし

てみたが、だめだ。



ぼくの手先より二十センチも高い。取れないと思ふと、

くやしくなって、木の幹をとんとたたく。せみは、びっ

くりしたやうに、「ジジ」と聲をたてて、とんで行った。

井戸ばたへ行つて、足を洗つた。ざあつと、つめたい

水をかけると、いい氣持だ。げたをはいて、うらの畠へ行ってみる。

なすも、きゅうりも、みんな暑さうにぐったりしてゐる。きゅうりにそへて立ててある竹に、とんぼが止ったり、はなれたりしてゐる。



畠のすみの日まはりは、暑い日をいっぱい受けて、金のお皿のやうなのが、三つ咲いてゐる。今では、ぼ

くよりもずっとせいが高いが、これもぼくが植ゑたのだと思ふと、何だかかはいいい氣がする。

暑い、暑い。うちへかへって、えんがはに腰を掛けてみると、川で、だれか遊んでゐるらしい。楽しさうな聲が聞えて来る。さうだ、ぼくも行ってみよう。

「おかあさん、川へ行ってもようございますか。」と大きな聲で聞いてみると、

「あぶないから、よく氣をおつけなさい。」と、あちらでおかあさんの聲がした。

ぼくは、帽子をかぶって、いちもくさんに走って行つた。

十七 日記

七月十六日 月曜日 晴



朝起きると、おとうさんは、もう庭の朝顔のせわをしてゐられた。

「ほうら、こんな大きな、赤い花が二つ咲いた。」

ど、に、こ、に、こ、顔。

学校では、三時間めに、三年生以上の合同體操があつた。暑い夏の日が、かんかんてりつける中で、行進をしたり、かけ足をしたり、體操をしたりした。

七月十七日 火曜日 晴

けさは、朝顔が三つ咲いてゐた。水色が二つに、赤が一つ。



学校では、四時間めに、共同作業をした。ぼくたちは、校舎のうらの草をむしった。先週の金曜日に抜いたのに、もうのびた草がだいぶある。一本一本きれいに抜いた。とし子さんが「きゃっ」といったので、見ると大きなみみずがある。先生が、

「みみずぐらゐに、どうしてそんな声をたてるのです。」とお笑ひになった。

七月十八日 水曜日 くもり

くもつてゐたせゐか、朝からむし暑かった。朝顔は、

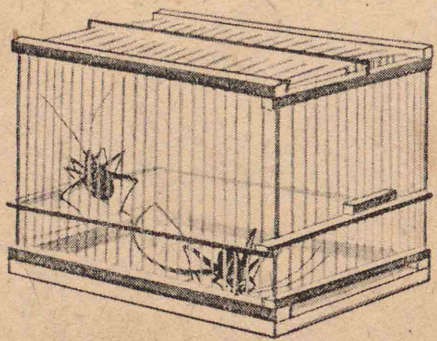
二つ咲いてゐた。赤一つ、白一つ。

三時間めの合同体操の時は、汗でべとべととした。夏は、かんかんとてつた方が、氣持がいいと思つた。

夕はんがすんでから、おかあさんと、ねえさんと、ぼくと三人で、えん日へ行って、すず虫を買つてかへつた。ねる時には、涼しさうな聲で鳴いてゐた。

七月十九日 木曜日 晴

朝起きると、すぐすず虫を見た。元氣なので、安心し



た。きうりを少しやった。

学校からかへってみると、戦地の兵隊さんから、はがきが来てゐた。この前、おもんぶくろと、おもん文を送ったので、そのへんじであつた。送ってあげたつりだうぐで、魚をつるのが楽しみだと書いてあつた。

七月二十日 金曜日 晴

今日は、海の記念日である。

朝禮の時間に、ラジオでも、そのお話があつた。教室で、先生から、

「今日が、どうして海の記念日になつたのでせう。」と聞かれた時、

「明治九年の今日、明治天皇が、明治丸といふ帆前船で、北海道から、横濱へおかへりになつたからです。」

と、朝ごはんの時、ねえさんから聞いたことをお答へした。

ラジオは、一日中、海のお話や、音楽で、にぎやかであつた。

十八 カッターの競争

今日は、海の記念日で、海軍のカッターの競争がありました。

夏の空は、からりと晴れて、白いかもめが、海の上を、すいすいとんで行きます。青い波の上に、赤・白・黄・みどりの旗が浮かんでゐます。カッターの競争の出發線です。沖の方にも、同じやうな旗が小さく見えます。海岸も軍艦の上も、おうゑんの水兵さんたちで、いっばいです。

「おまへたちは、この軍艦を代表して、競争するのだ。今日こそ、日ごろきたへた力を、ためすことができる。みんな心を合はせて、一生けんめい、たふれるまでこののだぞ。」

といふ艦長のことばにはげまされて、白組十三人の選手は、カッターに乗りうつりました。日にやけた、まっ黒な顔に、白いはちまきをすっかりしめてゐます。艇長が、

「かい、ひたせ。」

と號令を掛けると、

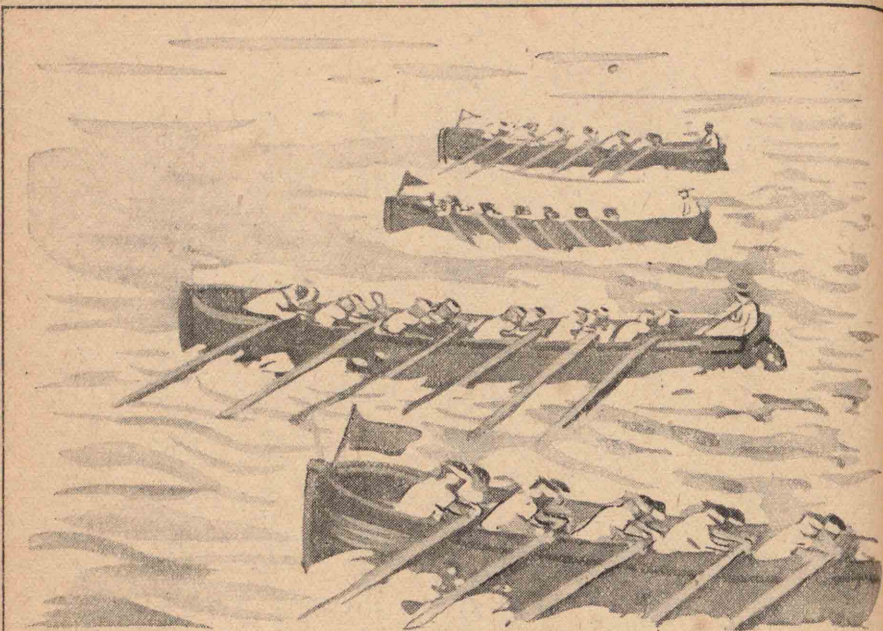
「オー。」

と、掛聲勇ましく、かいをいっせいに水にひたします。

やがて「ザ、ザ、ザー」と、力強く水をかきますと、あの太
いかいが、弓のやうに曲りました。

出發線に、四さうのカッターが並びました。用意のラ
ツパが鳴りました。「ドン」と出發のあひづです。

カッターは、いっせいにこぎ出しました。十二本の



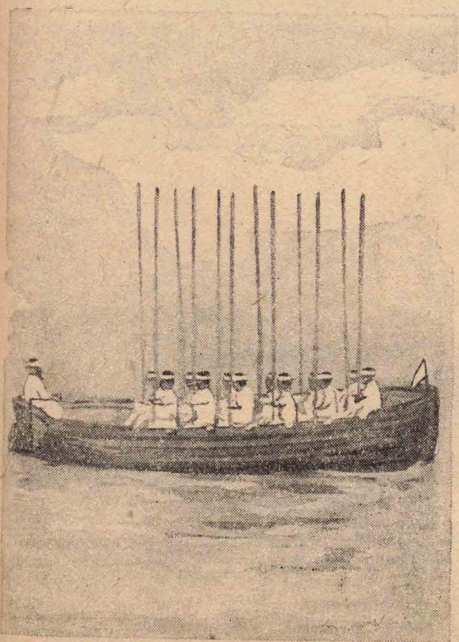
かいは、まるで一本のかいの
やうに、きちんとそろひま
す。一かきごとに、ぐんぐん
早さをまして進みます。は
く手が、あらしのやうに起り
ました。

カッターは、だんだん遠ざ
かって、小さくなりました。
旗を立てた船が、たくさん出

てみて、しきりにおうゑんをしております。

沖の旗をまはって、四さうのカッターは、だんだん、こちらへ近づいて来ました。

決勝線まで、わづか二百メートルぐらゐになりました。まだ勝ち負けはわかりません。選手は、カいっばいこいでゐます。艇長は、大きな掛聲で、選手をばげましてゐます。最後



の百メートルといふところで、白が、ぐいぐい出て来ました。

はく手が、さかんに起りました。

「ドン」。

決勝を知らせる銃の音がしました。

白が勝ったのです。

白のカッターからは、さっと、かいがいっせいに立ちあがりました。十三人の選手の顔は、にこにことうれしきうでした。

十九 夏やすみ

あすからうれしい夏やすみ、
まぶしく晴れた大空に、
ま白な雲が浮いてゐる。

あすからうれしい夏やすみ、
山べに野べに白ゆりが、
ゆめ見るやうに咲いてゐる。

あすからうれしい夏やすみ、
まき場のこまが朝風に、
いななきながら呼んでゐる。

あすからうれしい夏やすみ、
大波小波うち寄せて、
海がわたしを待ってゐる。

二十 になぎのみこと

あまてらすおほみかみ
天照大神は、になぎのみことに、

「日本の國は、わが予わが孫、その子その孫の、次々にお治めになる國であります。みことよ、行ってお治めなさい。おだいじに。天皇の御位は、天地のつづくかぎり、いつまでもさかえませうぞ。」

と仰せになりました。さうして、御鏡に、御玉と、御劔をおそへになつて、みことにお渡しになりながら、

「この鏡は、わがみたまとして、だいじにおまつりなさい。」

と仰せになりました。になぎのみことは、つつしんでお受けになりました。

大勢の神様が、お供をなさることになりました。いよいよおたちといふ時、先發の者が、急いでかへつて来て、

「下界へ行く途中に、恐しい男が、道をふさいで立ってをります。せいも高う



ございますが、鼻が恐しく高く、目は、鏡のやうでござ
います。その上からだ中から光を出して、天も地も、
明かるいほどでございます。」
と申しました。

天照大神は、このことをお聞きになつて、
「それは何者であらう。天あめのうずめ、たづねてまわれ。
とおいひつけになりました。」

天のうずめのみことは、すっかりした、しかもおもし
ろいお方でありました。行つてごらんになると、なるほ
ど相手は恐しさうな男です。うずめのみことは、わざ
と、おどけたやうすをして、お笑ひになりました。する
と、その恐しい男がい
ひました。

「おまへはだれた。ど
うして、そんなに笑
ふのか。」
「おそれ多くも、皇孫
になぎのみことのお



通りになる道を、ふさいで立ってゐるあなたこそ、だ
れです。」

と、うずめのみことは、お問ひ返しになりました。

相手は、急にやうすをかへて、

「いや、私は、皇孫がおいでになると承つて、ここへお迎
へに出てゐる者です。私が御案内いたします。私の
名は、猿田彦さるたひこと申します。」

といひました。

うずめのみことは、かへつてこのことを申しあげまし
た。

になぎのみことは、天照大神に、おいとまごひをなさ
つて、大空の雲をかき分けながら、勇ましくおくだりに
なりました。猿田彦さるたひこ神が、先に立って、御案内申しあげ
ました。

になぎのみことは、日向ひうがの高千穂たかちほの峯ほにおくだりに
なりました。さうして、天照大神のおことばどほりに、
日本の國をお治めになりました。

二十一 月と雲

月夜の晩、子どもたちが五六人集って、かげふみをして遊んでみました。

そのうちに、月に雲がかかりました。月は、雲にはいつたかと思ふと、すぐ出、出たかと思ふと、すぐまたはいります。かうなつては、かげふみもできません。子どもたちは遊ぶことをやめて、しばらく月を見てみました。

すると、一人の子どもがいひました。

「あれは、お月様が走つてゐるのだらうか、雲が走つてゐるのだらうか。」

月は、今、雲から出て、大急ぎではなれて行きます。さうして、次の雲の方へ、どんどん走つて行きます。

「お月様が走つてゐるのだよ。」

と、一人の子どもがいひました。

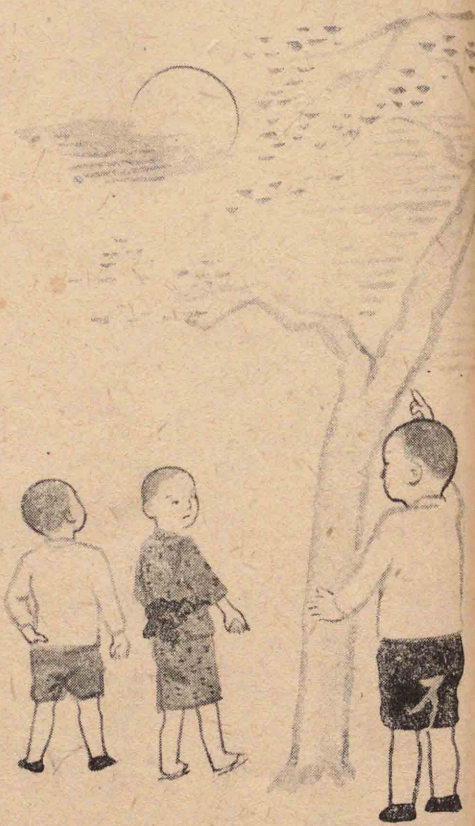
しかし、じつと月を見つめてみますと、月は動かないで、雲が大急ぎで飛んで行くやうに見えます。

「お月様ではない。走ってるのは雲だ。」
といふ子どもがありました。

しばらくは、「月が走る。」「雲が走る。」と、たがひにいひ
はつてゐました。

みんながわいわいふのを、初めからだまって聞い
てゐた一人の子どもがありました。その子どもは、こ
の時、みんなからはなれて、前の方にある木のそばへ行
きました。さうして、しばらく枝ごしに月を見てゐま
したが、

「ここへ来たま
へ。雲が走る
か、お月様が
走るか、よく
わかるよ。」



といひました。みんなは、木のそばへ来ました。

「ここに立って、お月様を、枝の間から見たまへ。」
と、その子どもがいひました。

そのとほりに、みんながしてみました。すると、月は

枝の間にじつとしてゐますが、雲はさっさと走って行きます。

「わかった、わかった。走ってゐるのは雲だ、雲だ。」と、みんながいひました。

二十二 軍犬利根

一カキトリ

利根は、小さい時、文子さんのうちで育てられた、勇ましい軍犬です。

文子さんが、ちやうど三年生になったばかりのところ、をぢさんのうちから、子犬を一匹もらって來ました。その親が、軍犬として、戦地ではたらいと聞いた文子さんは、もらった子犬も、りっぱな軍犬にしてみたいと思ひました。

子犬には、利根といふ名をつけました。それは、をぢさんの家のそばを流れてゐる、大きな川の名を取って、おとうさんがおつけになつたのです。

文子さんのうちでは、みんな犬がすきでした。利根の

来るずっと前にも、犬をかってゐた
 ことがあるので、文子さんは、ほん
 たうによく、利根をかは
 いがりました。朝夕、か
 らだの毛をすいたり、き
 れでからだをふいてやつ
 たりしました。毎日、きまつたや
 うに、運動をさせてやりました。たべものにもよく氣
 をつけて、間食などは、できるだけさせないやうにしま



した。おかげで、利根は、子犬のよくかかる病氣にもな
 らないで、すくすくと育ちました。

利根はかっこいい犬でしたから、文子さんに教へられ
 ると、「おあづけ」でも、「おすわり」でも、すぐおぼえまし
 た。文子さんは、利根がどこへでもついて来るので、か
 はいくてたまりませんでした。ただ学校へ行く時、何
 べん追ひかへしても、あとからついて来るのには困り
 ました。

文子さんは、をぢさんに聞いて、利根に「待て。」を教へ

ました。子犬ですから、これはなかなか聞きませんでしたが、決してしかったり、たたいたりしないで、少しでもできると、頭をなでてほめてやりました。のちには、文子さんが學校へ行く時、とんで來ても、

「すわれ。」待て。

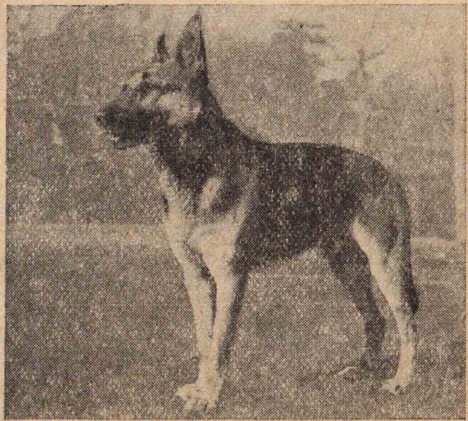
といひますと、行儀よくすわって、お見送りをするやうになりました。

かうして、その年の秋も過ぎ、冬の初めになりますと、利根は、もう子犬ではありませんでした。近所の、どの

犬よりも大きく見えました。三年生の文子さんがつれて歩いてゐるのに、向かふから來る人は、大人でも、遠くからよけて通るほど、強さうな犬になりました。

お正月が來るとまもなく、文子さんがねがつてゐたやうに、利根は、軍隊の軍犬班^{はん}へ、はいることになりました。

出發の前の晩、文子さんは、利根にたくさんごちそう



をしてやりました。自分の育てた犬が、いよいよ軍犬になるのだと思ふと、うれしくてたまりませんが、別れるのは、ほんたうにつらいと思ひました。

文子さんは、日の丸の小さな旗を作つて、利根の首につけ、寒い日の朝、おかあさんといっしょに、停車場まで見送つてやりました。

二

それからのち、利根のかかりの兵隊さんから、ときどき、利根のやうすを知らせて來ました。文子さんも、手



紙を出しました。

文子さんが、四年生になつた秋のころ、兵隊さんから、次のやうな手紙が來ました。

利根は、たいそうりっぱな軍犬になりました。高いしゃうがい。わけもなくとびこえます。腹を地につけて、ふせをしたり、川を泳いで渡つたり、遠くにかくしてある手ぶくろを、すばやくさがしあてたりし

ます。もう、軍犬のすることは、どの犬にも負けないで、りっぱにやりとげます。

あなたから手紙が来ると、それを、利根に見せてやります。利根は、なつかしさうに、にほひをかきながら目の色をかへて喜びます。あなたが、かはいがつてみられたのと同じ氣持で、私も、利根を一生けんめいで育ててみます。どうぞ、安心してください。

三

それから半年ほどたって、ちゃうど、文子さんが五年生になったころ、利根は、勇ましく北支那へ出征しました。

りかうな利根は、戦場で、敵のあるところをさがしたり、夜、ふいに近寄らうとする敵の見はりをしたり、隊と隊との間のお使ひをしたり、何をさせてもすばらしいはたらきをしました。

そのうちに、利根のついてある部隊は、何倍といふ敵を相手に、はげしく戦ふ時が来ました。みかたの第一線は、敵前わづか五十メートルといふところまでせま

つて、ざんがうの中から、敵をこころげきしましたが、敵は多数で、弾は雨あられのやうに飛んで來ます。みかたはそのままで、一週間もがんばりつづけましたが、その間、第一線と本部との間をお使ひするものは、軍犬利根でありました。

利根は、毎日、五回も六回も、この間を行ったり來たりしました。首わの、ふくろに、通信を入れてもらって、「行け。」

といはれるが早いか、どんなにはげしく、弾が飛んで來る中でも、勢よくかけ出しました。のちには、敵が利根の姿を見つけて、弾をあびせかけます。それでも利根は、弾の下をくぐるやうに抜けて、走りつづけました。かかりの兵隊さんはもちろん、みんなの兵隊さんが、利根のかうしたはたらきを見て、涙を流すほどでした。

いよいよ、わが軍が、敵の陣地にとつげきする日が來ました。

午前五時、まだ、あたりはうす暗いころ、利根は、最後の通信を首にして、

「行け。」

の命令とともに、走り出しました。敵の弾が、うなりをたてて飛んで來ます。利根は、ひた走りに走りました。本部では、利根のかかりの兵隊さんが、今にも、利根が來るだらうと思つて、待つてゐました。すると、向かふの、かうりやんのあぜ道の中に、利根の元氣な姿が見えました。

「ようし、來い、利根。」

と、兵隊さんは呼びました。



利根は、もう百メートルで、本部といふところへさしかかりました。ちやうどその時、敵の弾が、ばらばらと飛んで來ました。利根は、ぱったりとたふれました。

「ようし、來い、利根。ようし、來い、利根。」

と、かかりの兵隊さんは、氣がくるつたやうに呼びつづけました。



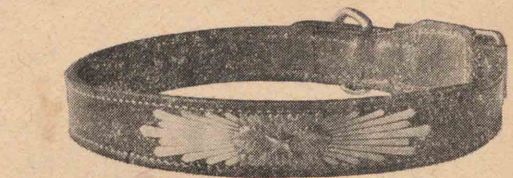
この聲が通じたのか、利根は、むっくりと立ちあがり
ました。しかし、もう走る力がありません。かかりの
兵隊さんは、敵の弾が飛んで来るのもかまはず、はふや
うにかけ出して、利根のからだを、しっかりとだきかか
へました。

一時間ばかりののち、わが軍は、勇ましく敵にとつげ
きして、とうとう、その陣地をせんりやうしました。

四

かギトリ

利根のてがらは、かかりの兵隊さんから、くはしく文
子さんに知らせて来ました。さうして、お
しまひに、



利根は、足をやられたただけですから、まも
なく、よくなることと思ひます。利根は、
そのうち、きつと甲號功章を、いたたくに
ちがひありません。

と書いてありました。この手紙を見て、文子さんは、
「まあ、利根が。」
といったまま、つつぶして、泣いてしまひました。

「利根はえらい。感心なやつだ。」
と、おとうさんも涙を流しながら、お喜びになりました。

二十三 秋

ちんちろ松虫、
虫の聲、
庭の畠で
鳴きました。

ぎんぎら葉の露、
草の露、
月の光が
ぬれました。

とろとろもえる火、
あろりの火、
栗がはぜます、
にほひます。

二十四 つりばりの行くへ

一

ほでりの命みことはおにいさま、
ほをりの命はおとうとご。

あに神さまはつりのため、
おとうと神はかりのため、

毎日まいにち海と山、

おいでになってをりました。

ところで、ある日のことです。

ほをりの命「にいさん、願ひがあります。」

ほでりの命「何だ。」

ほをりの命「にいさんは、毎日海へ出て、魚を取っていらつしやる。私は、毎日山へ行って、鳥や、けものを取ってゐますね。」

ほてり「さうだ。」

ほをり「そこで、お願いがあるのですがね。」

ほてり「どういふことだ。」

ほをり「今日一日だけ、私に海へ行かせてくださいませんか。」

か、「にいさんは、山へいらっしやつて。」

ほてり「そんなことは、いやだよ。」

ほをり「たった、一日だけでいいのです。」

ほてり「いくら一日でも、いやだ。」

ほをり「さうおっしやらないで、今日だけ、私につりをさせ

てください。」

ほてり「そんなに、つりがしたいのか。」

ほをり「さうです。私も、一度、あの大きな鯛をつつてみた

いのです。」

ほてり「では、つりをしてみるが

いいさ。しかたがない、

わたしは山へ行かう。」

ほをり「ほんたうですか。」

ほてり「ほんたうだ。このつり竿を持って行け。」



ほをりの命 「ありがたうございます。に
いさんは、この弓と矢を持
つて、山へいらつしやい。」

二

ほをりの命 「どうして、つれないのなら
う。朝から、一匹もつれない。

その時、何かが糸を引く。

おや、引く、引く。ぐいぐい、引くぞ。しめた、大きな
魚だ。引きあげてやらう。よいしよ。



ほをりの命が、つり竿をお引きあげになる。糸が、ぷわりと
切れて、魚が逃げる。

しまった。大きいのを逃した。

残念さうに、つり糸をいぢつていらつしやつたが、ふと、つ
りばりのないのに気がついて、

つりばりが無い。どうしよう、困ったな。ああ、し
かたがない。にいさんにあやまらう。にいさんは
おおこりになるだらうな。」

三

の命 「山へ行つても、小鳥一羽取れなかった。おもしろくもない。さ、弓矢を返すよ。」

の命 「まことにすみません。」

の命 「何かつれたか。」

の命 「ちつとも、つれなかつたんです。つれないどころか、申しわけのないことをしてしまひました。」

の命 「どうしたのだ。」

の命 「つりばりを、魚に取られてしまひました。」

の命 「取られたつて。」

の命 「さうです。」

の命 「——」

の命 「どんなことでもして、おわびいたします。」

の命 「おまへからいひ出しておいて、だいじなつりばりをなくしてしまふなんて、あんまりだ。」

の命 「ほんたうに、申しわけがありません。どうぞ、お許しください。」

の命 「いや、許すことはできない。」

四

ほをりの命は、海へで泣いていらつしやる。そこへ、一人の年取つた神様がおいでになる。

神様「もしもし、あなたは、どうしてそんなに泣いていらつしやるのですか。」

ほをり「にさんのだいじなつりばりを、魚に取られて、困つてゐるところです。」

神様「それは、おきのどくな。私が、いいことを教へてあげませう。そこに、舟があるでせう。あれに、すぐお乗りなさい。私が、その舟を押してあげますか

ら、しばらく、目をつぶつていらつしやい。すると、まもなく、きれいな御殿へお着きになるでせう。」

ほをりの命「きれいな御殿。何の御殿ですか。」

神様「海の神様の御殿です。その御殿の門のそばに、井戸があつて、井戸のそばには、大きな木が立っています。あなたは、その大きな木にのぼつて、待っていらつしやい。」

ほをりの命「さうすると。」

神様「海の神様が、きつといいことを教へてくださるで

せう。さあ、舟にお乗りなさい。押してあげますから。」

五

海の御殿の門の前に、大きな木が立ってゐる。ほをりの命は木を見あげながら、

ほをりの命「ははあ、この木のことだな。のぼつてゐよう。

木にのぼつて、下をござらんになる。

あ、井戸がある。きれいな水だな。」

女が出て来る。井戸の水をくまうとして、

女「まあ、りっぱな神様が、水にうつつていらつしやる。」

木の上を見あげて、女は、うやうやしくおじぎをする。

ほをりの命「水を一ぱいください。」

女「かしこまりました。」



女は、井戸から水をくんで、ほをりの命にさしあげる。ほをりの命は、ぐつとお飲みになつて、

ほをりの命「ああ、うまい水だ。ごちそうさま。」

六

正面に、海の神様が腰を掛けていらつしやる。そこへ、女が出て来る。

女 「海の神様。」

海の神様 「何だ。」

女 「門の前の木に、りっぱな神様がいらつしやいます。」

海の神様 「りっぱな神様が。」

女 「さやうでございます。」

海の神様 「それは、きつと日の神のお子様がちがひない。お迎へしませう。」

海の神様が、ほをりの命をおつれ申して、出ておいでになる。

海の神様 「どうぞこちらへ。」

ほをりの命は、腰をお掛けになる。

よくおいでくださいました。何か御用でございませうか。」

ほをり「じつは、海でつりをしてゐたら、つりばりがなくなつてしまひました。」

海の神「つりばりが。」

ほをり「さうです。それは、兄のだいじなつりばりで、私も困つてしまひました。すると、年取つた神様が、私に、海の御殿へ行くやうに教へてくれました。それで今ここへやつて来たのです。」

海の神「それは、ほんたうにお困りでございませう。さつそく、さがさせてみませう。」

女に向かつて、

魚たちを、みんなここへ呼び集めるやうに。」

女「はい。」

女は、魚たちをたくさん呼んで来る。

呼んでまゐりました。」

海の神「これでみんなか。」

女「はい。鯛だけは病氣でねてゐますので、ここへまゐつてゐません。」

海の神「さうか。みんなの者にたづねるが、だれか、日の神

のお子様をつりばりを、取って行ったものはないか。
魚たち「ぞんじません。」

海の神「いや、たしかにあるはずだ。だれか、知ってあるものはあないか。」

魚たち「少しもぞんじません。」

海の神「をかしいな。」

海の神様は、しばらくお考へになつて、女に、

では、鯛をちよつとここへ呼んで来てくれないか。」

女「はい。」

女は、鯛をつれて出て来る。

鯛「何か御用でございませうか。」

海の神「おまへは、日の神のお子様をつりばりを知つてあ

ないか。」

鯛「じつは、この間、つりばりをのどにかけまして、た

いへん苦しんであるところでございます。」

海の神「あ、それだ。」

女に向かつて、

鯛ののどから、そのつりばりを取ってやれ。」

女 「はい。」

つりばりを取る。

鯛

「あ、これで、すっかりらくになりました。」

女は、つりばりを水で洗つ

て、海の神様にさしあげる。

海の神「なるほどつりばりだ。」

海の神様は、ほをりの

命の前にひざまづいて、



海の神「このつりばりでございませうか。」

ほをりの命「あ、これだ。たしかにこれです。」

ほをりの命は、思はずにつこりなさる。

海の神「見つかって、ほんたうによるしうございませう。」

だいじな、だいじな つりばりが、

出て来て神さま およろこび。

いたい、いたいと泣いてみた、

露 (123)	倍 (115)	仰 (96)	室 (86)	樂 (81)	穗 (65)	唱 (49)	刃 (30)	泳 (21)	屋 (4)
願 (125)	第 (115)	相 (99)	競 (88)	帽 (82)	隊 (65)	停 (50)	桑 (31)	初 (23)	鷄 (5)
鯛 (127)	彈 (116)	問 (100)	發 (88)	記 (82)	面 (68)	鐵 (51)	橫 (34)	短 (24)	鳴 (5)
	回 (116)	承 (100)	艦 (88)	晴 (82)	狀 (69)	側 (53)	香 (35)	息 (24)	杉 (9)
	信 (116)	案 (100)	組 (89)	以 (83)	賴 (70)	煙 (53)	途 (37)	茂 (24)	殿 (9)
	淚 (117)	峯 (101)	選 (89)	體 (83)	電 (70)	干 (53)	死 (38)	殘 (27)	御 (9)
	陣 (117)	飛 (103)	號 (90)	操 (83)	掛 (70)	寄 (56)	感 (41)	酒 (29)	居 (10)
	暗 (117)	運 (108)	令 (90)	共 (84)	留 (72)	者 (57)	皿 (41)	恐 (29)	菓 (18)
	命 (118)	食 (108)	決 (92)	業 (84)	桐 (78)	皮 (57)	底 (42)	飲 (29)	糖 (18)
	甲 (121)	儀 (110)	勝 (92)	週 (84)	幹 (79)	莖 (63)	竿 (44)	劔 (30)	愛 (19)
	功 (121)	敵 (115)	最 (92)	汗 (85)	井 (79)	姿 (63)	板 (45)	拔 (30)	曲 (19)
	章 (121)	部 (115)	位 (96)	念 (86)	暑 (80)	植 (64)	許 (48)	血 (30)	綿 (20)

鯛もよろこびおめでたい。
 めでた、めでたとさかなたち。
 みんなまふやら歌ふやら。

昭和十七年二月十四日
昭和十七年二月十四日
昭和十七年二月十四日
印刷發行

著作權所有

著作兼
發行

文部省

初等科國語一
定價金貳拾壹錢

昭和十七年二月十七日
文部省檢査濟



翻刻發行
兼印刷者

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地
東京書籍株式會社
代表者 井上源之丞

印刷所
東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地
東京書籍株式會社工場

發行所

東京書籍株式會社

初三
赤坂良孝

